巻　頭　言

2022年度の事業報告書の発刊に際しまして、一言ご挨拶を述べさせて頂きます。

本年に入ってwithコロナの方向性が明確になり、５類感染症としての対応に社会が移行したものの、昨年度の大半、我々サステイナビリティ研究所の活動は依然新型コロナウイルス対策対応の影響を大きく受け、本来目指した取り組みが限定的になってしまいました。また加えて、昨年２月に開始されたロシアのウクライナ侵攻による戦禍も継続され、人的、物的被害拡大のほか、エネルギー供給バランスが崩れることによって、日本においてもガソリンや電気、ガス価格の高騰の影響を受けるなど、本学並びに本研究所が目指す社会のサステイナビリティ・持続可能性に対する危機的な状況が継続されたと言えます。

このような背景の中、サステイナビリティ研究所の活動として、昨年度より学生向けに開始した「SDGｓ活動推進助成制度」で５件の個人及び団体への助成を行い、SDGs活動を増強して行いました。ロシアのウクライナ侵攻に対しても、SDGｓが目指す目標のひとつである「平和と公正をすべての人に」を達成すべく、「ウクライナ避難民の支援と人類社会の未来像」と題して本研究所主催で学術講演会を開催いたしました。この講演会は、本学がウクライナからの避難民として受け入れているユリア・メドベージェワさんの研究発表会を兼ね、加えて翌日開催したウクライナ民族楽器バンドゥーラの演奏者であるナターシャ・グジーさんのウクライナ支援演奏会とも関連付けて実施したものです。

コロナ禍やウクライナの戦禍があっても、このように社会の情勢に合わせて、社会の持続可能性を目指す活動を実施できたことは、中国の諺にあり私の座右の銘でもある、「人間万事塞翁が馬」に例え、どのような状況でも、志が正しければ災いが福に転化できることを示していると確信するところです。

年度が変わり本年４月末には、本学と鳥取市らが共同提案していた環境省の「脱炭素先行地域プロジェクト」が採択され、本研究所もこのプロジェクトを助成する研究開発をスタートしています。社会全体の脱炭素の動きは、SDGｓの目標にも掲げられていると同時に、政府等が主導する「GX（Green Transformation）」と呼ばれる社会全体のしくみを化石燃料から脱却する取り組みであり、研究開発の新しい方向性の胎動が生じてきています。このような本研究所の今後の活動に、ご期待頂ければ幸甚に存じます。

最後になりますが、本学内及び鳥取県、鳥取市、鳥取商工会議所等、SDGｓ諸活動に日頃よりご協力頂いている皆様に感謝申し上げるとともに、この報告書の成果が、将来社会をより良くする人類の英知の一端になることを期待して、私の巻頭言に代えさせていただきます。

2023年９月吉日

サステイナビリティ研究所長

田島　正喜